

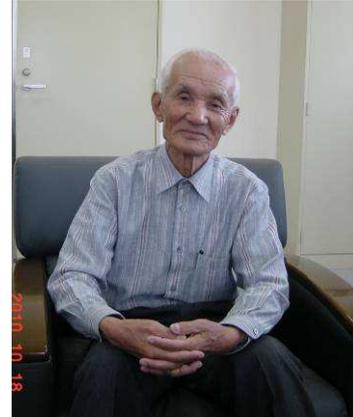
昭和の南海地震体験談

氏名:真砂 勝己(まなご かつみ)

生年月日:昭和5年5月1日

地震を体験した場所:田辺市

当時の家族状況:祖母、父、母、姉、妹3人、弟



1) 地震発生時の状況

当時 16 歳、平屋建ての自宅で 9 人全員寝ていて、地震で家が揺れているというのがわかった。父に全員、起こされ、私は、「表に出て、高尾山を見て、稲光してないか見るように」言われて、見ていたら、“ピカピカ”光ったので、父に報告すると、「津波来るから、すぐ逃げるぞ」と言われ、年の小さい子を背負い、妹達と、父は、祖母を背負い、母は着替えを持って、門の畑から山に逃げた。

2) 津波襲来時の状況

山に逃げた頃、「津波来るぞー！」という声を聞いた。

近所の 8 軒、皆、無事で同じように逃げていた。

避難した山で、父が牛小屋の門を、開けて逃げてくるのを忘れて来たから、私に、「一緒に、家の牛小屋に戻ろう」というので、来た道は、津波で通れないから、山越えて、牛小屋を見たら、第二波の津波が引いた後で、屋根の無い牛小屋だったので、牛は無事で、門外すと飛び出てきた。(農家はどことも、牛や家畜をととても大切に、扱った)

裏の竹藪に、牛と父と、地震(余震)津波が治まるまで、じっとしていた。

家には一日入れなかった。

3) 家族の行動・被害

全員無事。家族は、夕方には、山を下りて来た。

4) 集落・周囲の被害

家の中は泥だらけ、床上浸水。

床板ごと畳が浮いたのか、所々濡れてはいたが、布団は、びしょ濡れでは無かった。

市全体では、69 人死亡。

5) 地震・津波後の生活

家の「泥出し」から家族でした。井戸水使って洗った。井戸の無い家は、借りて洗った。

戦時中の配給制度がまだあったので、缶詰・乾パンが隣保班によって配られた。

軍の払い下げの軍服を貰った。復旧の手伝いも、隣保班が来て助けてくれた。

S22年6月8日に天皇さんが来て、県も国も村長の陳情を聞いて、それから防潮堤の工事が急ピッチで行われた。それに伴いあちこち直っていった。

公共の被害は公共で、自分の被害は自分で直して生活を整えていった。

6) 次の災害への備え

津波対策委員会から沼津のフラップゲートを視察して、水門や防潮堤の嵩上げの要望書提げて東京まで行き、紀南選出の議員さんの所に行って、陳情し、防災大臣に陳情し、国土交通省港湾局長に陳情したりしている。

津波対策委員では、ソフト的には自主防災は徹底している。子供達への教育では、地震津波については、伝承している。

後は、ハードの部分で65年前にこれだけの人々が亡くなって、S22年6月の天皇さんの巡幸で田辺に来てくれて、防潮堤は出来たけど、次に備えて、他所に出来ている様な、水門で次の災害を防ぐように、なかなか出来ないのが辛い。

7) その他

地震津波の前日に、夕方、知り合いの小父さんが私の家に寄り、山越えて、又、帰り道の夜に、私の家に寄ったときに、夕焼けが、見たことも無いぐらい、真っ赤で、「何かあるのでは」と言っていたことを、地震津波の後に、思い出したことがあった。